

# 「木村明啓翁画像（暁鐘成像）」 松川半山画 花家主人賛」について

岩佐 伸一

## はじめに

ここに紹介する資料（図一、図二、図三、図四）は、大坂の著述家暁鐘成（一七九三～一八六〇）の肖像を松川半山（一八一八～八二一）<sup>1</sup>が描き、花屋主人こと鼎左（一八〇二～六九）<sup>2</sup>が着賛した作品（以下、本資料とする）である。

本資料は、大阪関係資料のコレクションとして知られた鬼洞文庫に収蔵され、近年当館の所蔵となり、修復を施したうえで、平成二九年度特集展示「ほのぼの俳画 生田南水」展において公開した。この展観は、明治から昭和にかけて俳諧の宗匠として、また文筆や好古の人として知名であった生田南水（一八六〇～一九三四）の俳画を紹介するための企画であったが、南水が鐘成の如き人と評されていたこと、また南水の祖父と鐘成が知己であったこと、さらには瑞龍寺にある鐘成墓碑の建立に携わったことなど、鐘成とは縁があるため本資料を参考資料として展示した。本資料については部分図が紹介<sup>3</sup>されたことはあるが、これまでの鐘成研究において触れられることはなく、全図の紹介がなされたこともない。よって多数

の著述をなし、大坂の文化に大きな足跡を残した鐘成の面影を知ることができる好資料として、また製作年代の明らかな半山画としても資料的価値があると考えここに紹介する。

なお像主の鐘成の伝記や事績については、石割松太郎「暁鐘成伝」（船越政一郎編『浪速叢書』第七巻、昭和二年（一九二七）、浪速叢書刊行会）、長友千代治「暁鐘成研究」（大阪府立図書館編『大阪府立図書館紀要』第六号、昭和四五年（一九七〇））が詳しく、本稿では新たに加える事績のないことをお断りしておく。

## 一 資料の概要

本資料の概要は次の通り。

名称	木村明啓翁画像（暁鐘成像） <sup>3</sup>
作者	松川半山画 花屋主人（鼎左）賛
材質	紙本着色、賛は墨書
員数	一幅

法量 縦一三〇・三センチメートル 横三〇・六センチメートル  
年代 文久元年（＝万延二年（一八六一））二月二十五日賛

上部には鼎左が鐘成の伝を記し、末尾には「萬延二年辛酉春如月念五日」とあるところから、万延二年（一八六一）、すなわち文久元年二月二十五日の着賛と知られる。画面下部には半山が鐘成の像を描く。

## 二 賛文

まずは賛文の翻字を示す。／は改行を示し、できる限り本資料に用いられた文字を採った。なお翻字は肥田皓三先生（元関西大学教授）よりご教示いただいた。

「華屋」（朱文瓢形印）

性ハ木村名明啓号晴翁俗彌四郎と称す浪華市井乃産にして頗近世乃一奇人なり又暁鐘成ハ門生に襲て／鷄鳴舎と革め童蒙教訓民家文用乃雜書其外數篇を著し狂歌及畫を善して雷鳴四方に轟く先年難波なる／瑞龍禪寺乃傍らに居を移して在職斎南坡といふ後薙髮して好む処に随ひ謾に未曾志留坊一禪と云其記あり其歌に曰／すつてよくにたるみそしる坊主とそ是やしやくし乃すくひならまし或ハ手鍋庵の侘に遊び中頃西南乃諸邨に／遊歴していつらさる処なし既に其名処図會をあらはす萬延紀元庚申乃冬十二月申乃九日といふ日かり初乃病ひに／臥し暁乃かねを一期として泉下乃客となるこゝに友人松川半山其肖像を写し追福作善の雅筵を開く因に／其略傳及び遺吟を記して以て後の記念とはなし侍りぬ 骸骨乃上を粧ふてはな楓さくら

ぬ先が深い／たのし美六十有八晴翁 懷旧花影あとに残すにほひや花もみち 花屋主人「桃之本」（朱文長方印）／萬延二辛酉春如月念五日

これを記したのは大坂の俳人鼎左である。鼎左は、氏を藤井、号は鼎左のほか大黒庵、花屋庵、桃の本などと称した。備後出身で大坂に至り、奇淵に俳諧を学ぶ。後に大黒庵などの号を師から受け継ぎ、安政三年（一八五六）刊の『浪華名流記』には、俳諧はもとより琴や書画も善くしたと記される。

さて本文は、鐘成の姓名号に始まり、その著述が多くあったこと、狂歌や作画に優れていたこと、瑞龍寺近傍への転宅、狂歌を挙げ、さらには各地を遊歴し名所図會を著したことを記す。ここまでの配列や内容は、文事や芝居を好む傍ら高松藩家老を務めた木村黙老（一七七四～一八五六）の著述『京撰戯作者考』に類似した点が多くある。その成立年は知られないものの、黙老は安政三年（一八五六）に没しているためそれ以前であることは確かである。文言がすべて一致するわけではないが、『京撰戯作者考』は本資料に先行するため、鼎左がそれを参考にした可能性、または双方の元となるような記載の存在を指摘しておく。次いで鐘成の没年や月日、本資料の制作に関する事情、鐘成の狂歌、鼎左の句が続く。ここに記される没年月日は既に知られているものと齟齬はない。興味深いのは半山が、鐘成の「追福作善の雅筵」を開くにあたって本資料を制作したと記す点である。半山が鐘成と至って近い関係であったことは先学により指摘される場所であるが、この点からは、肖像の執筆および追善会の開催を半山が行ったとも読み取ることができる。これまでも文久元年一月には甥によつて鐘成の追薦がなされた際の刷り物が紹介<sup>4</sup>されているものの、そ

れに先んじて、没後間もなく血縁者ではない半山が追善会を開いた可能性があることから交誼の深さが知られよう。また遺吟とされるここに記される狂歌については、本作品以外にも別号のひとつ晴翁の署名がある色紙の存在が、先掲長友氏論考<sup>(5)</sup>に報告されている。

### 三 画像

本資料の像主を描いた半山は、文政元年（一八一八）または文政五年、狂歌師鬼粒亭力丸を父として大坂に生まれ、四条派の絵師菅松峰を師として画を学び、本作品の像主である鐘成の著述に多くの挿絵を描いている。版本挿絵の作例が多く、日本古籍総合目録データベースによれば一六〇件を上回る著述<sup>(6)</sup>に関与した。その研究は、長友氏や影山純夫氏により版本を主体とした画業が詳述<sup>(7)</sup>されている。

両氏の研究においては版本挿絵がその対象の主体を占め、近年になって中野朋子氏の論考により、肉筆画も祖上に上ることとなった。従来、版本挿絵に研究の重きが置かれていたことについては、影山氏も述べられているように、肉筆画の存在が多く確認できていなかったことが大きな要因を占めると考えられる。このような状況は現在でも変わることはなく、筆者も半山の肉筆画、特に画稿ではない本画を知る機会は少ない。そうとはいえ、「納涼風俗図」（尼崎市教育委員会蔵）、「大阪名所絵巻物」のうち「新町九軒の夜桜」（大阪府立中之島図書館蔵）<sup>(8)</sup>、「雲煙過眼帖」のうち「大阪歴史博物館蔵」、「大坂祭事風俗図」（大阪歴史博物館蔵）、「浪華勝概帖」のうちの数図（大阪歴史博物館蔵）などが紹介されており、半山はある程度肉筆画を手掛けていたことが確認できる。

本資料画像作者の半山と像主鐘成の交誼のほどは、長友千代治「松川半山 一 幕末・明治維新期における一挿画作者の動向」（谷山茂教授退職記念事業実行委員会編『谷山茂教授退職記念 国語国文学論集』、塙書房、昭和四七年（一九七二）所収）において詳しく<sup>(9)</sup>、同論攷では、その画業を区分する際に鐘成を基準とされる点においても鐘成の重要度が知られる。

さて、「翠栄堂半山寫」「松川安信」「白文方印」「義卿」「白文方印」の署名と印章を伴う半山画に目を移すと、剃髪し、黒の羽織を身に着けた姿で描かれる。像主は正座し、向かって左方を向く。羽織は黒色ではあるものの濃墨による均質な着色ではなく、袖や裾にはかすれも見え濃度には差があり、平板さを避けているかのようである。襦袢を白く、着物は暗緑色、面貌は代赭で塗られ、口元にはわずかに朱色が施される。羽織と同じく着物の着色にも筆触が分かる程度のむらが見られる。像は淀みのない輪郭線で表され、かすれが生じている点からは運筆に速さが認められる。像に向かって右側の肩から下方への線、すなわち袖や裾の線は濃く、左側とは濃度の差が認められる。鑑賞者からすると濃い部分は手前に来ると認識されるため、奥行き感覚を生み出すための配慮と受け取ることができようかむらのある彩色とともに、半山の平板さ回避の細やかな表現といえよう。頭部に着目すると、鼻が面貌輪郭線の内側に収まっており宮本君山『漢画独稽古』（文化四年（二八〇七））に見られる人物図のうち「四分面図」に近い。頬骨が出ており、毛の豊かな眉はやや釣り上がり、表情としては陰しく見える。背景は描かれず、像主以外に描かれるものは画面向かって左にある巾着袋のみである。生前の鐘成の姿は、嘉永元年（一八四八）刊の同人著作『鑑日奇観』<sup>(10)</sup>のうちにある「鑑日清談家合之図」に見え、こ

ちらも剃髪姿、黒の羽織に無地の着物を身に着けている。やや前屈姿勢ではあるが、向かって左方を向く点、少し瘦けぎみの頬などを含めて本資料と共通する点があり、本資料は鐘成生前の姿に近いものといえよう。

江戸時代も後期から末期になると、庶人の肖像画が描かれる例が多くなる。試みに地域を大坂、時代を幕末に、像主を庶人とした作例に限ると、当館には「若松主人像 長谷川貞信筆」（図五）と「藪鶴堂像 藪長水筆」（図六）の所蔵例を挙げることができる。これらと本資料を比較すると、いずれも像主は正座をし、向かって左を向き、像主の鼻先は輪郭線の内側に収まるかほぼ重なるところから、先に挙げた宮本君山の言を借りれば「四分面」または「三分面」の表現を採り、手は膝に指を揃えて置く、何らかの物品が描き添えられる、床面は描かれない、款記や印章は像に向かって右側に記される、画面下端より画面全体の五ないしは六分の一ほどを余白とし、像はその上方に位置するなどの点が共通する。かつ、本資料も含めていずれも対となる画像（例えば婦人像）などは現存しない。また、長谷川貞信（一八〇九〜七九）と藪長水（一八一四〜六七）は、ともに半山（二八一八〜八二）と生没年が比較的近く活動時期も重なる。さらに、制作者や像主の属性は明らかではないものの「米屋善七像 宣長筆」（図七）も収蔵しており、こちらも例示した作例と類似した様相を見せる。

僅かな例かつ粗々ではあるものの、本資料が当時の大坂における庶人の肖像の典型的な表現を採っている可能性が指摘できる。

## おわりに

本資料の賛が記された文久元年（『万延二年（一八六一）』の前年十二

月十九日に鐘成は亡くなったが、本図の賛はその約二ヶ月後に記され、絵も同時期と見られる。よって伝や画像は鐘成の真を得ていよう。追善会に掲げることを目的とした遺像であるため、画像と賛文には一定の敬意が込められてもいようし、同時代の庶人の肖像としての型を踏襲している点は指摘したとおりである。

鐘成、鼎左、半山の三者の相互関係がいかなるものであったのかについては、筆者浅学のため全く触れることができなかった。江戸時代後期から幕末にかけての大坂における肖像画の展開とともに、それが明らかとなることを願い本資料の紹介を終える。

## 註

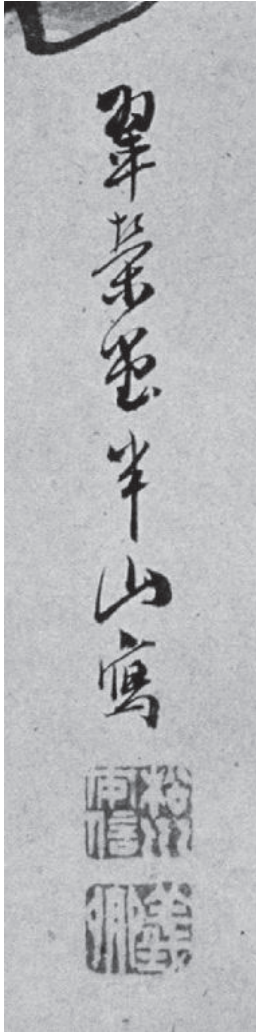
- (1) 半山の生年については異説がある。『浪華名流記』（安政三年（一八五六）刊）では生年を文政五年（一八二二）とし、船越政一郎「松川半山伝」（『浪速叢書』第七卷、昭和二年（一九二七）、浪速叢書刊行会）では文政元年（一八一八）とする。本稿筆者にはいずれが正しいのか判じがたいゆえに併記した。
- (2) 中野朋子「松川半山筆「納涼風俗図」についての一考察——制作年代と描かれた景観——」（大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館研究紀要』第六号、平成一九年（二〇〇七）所収）
- (3) 資料の名称について付言しておく。暁鐘成の姓は木村、名は明啓であるため付与された名称と解されるが、広く知られている筆名の暁鐘成をも併記することが望ましいと考えたため、今回は当館登録資料名称に（暁鐘成像）を付加した。
- (4) 長友千代治「暁鐘成研究」（大阪府立図書館編『大阪府立図書館紀要』第六号、昭和四五年（一九七〇）） 文久元年条および挿図参照
- (5) 前掲註の長友氏論考のうち、嘉永五年の条に記される。

- (6) <http://base.nijl.ac.jp/~tkoten/> 平成三〇年〔二〇一八〕八月三十一日時点かつ検索欄の「全項目」において「松川半山」を検索語とした数値。
- (7) 半山にかかわる主要な先行研究としては、註2の中野氏論攷のほか、以下の論考が挙げられる。
- 長友千代治「松川半山著作年表稿」(愛知県立大学国文学会『愛知県立大学説林』第二〇号、昭和四七年〔一九七二〕所収)
- 長友千代治「松川半山」(幕末・明治維新时期における「挿画作者の動向」(谷山茂教授退職記念事業実行委員会編『谷山茂教授退職記念 国語国文学論集』、塙書房、昭和四七年〔一九七二〕所収)
- 多治比郁夫、佐藤敏江「明治六年の松川半山」(河内屋茂兵衛著書簡と著画刊行年表)(大阪府立図書館編『大阪府立図書館紀要』第二四号、昭和六三年〔一九八八〕所収)
- 影山純夫「松川半山論」(神戸大学「近代」発行会『近代』第八五号、平成一二年〔二〇〇〇〕所収)
- 大高洋司「収藏品紹介 松川半山旧蔵本について」(『館報池田文庫』第一八号、平成一三年〔二〇〇一〕所収)
- 枝松亜子「近代への視点 松川半山の「風景画」をみる」(『関西大学哲学』山岡泰造先生古希記念論集』第二四号、平成一六年〔二〇〇四〕所収)
- 中野朋子「松川半山筆肉筆風俗画にみる幕末維新时期の大坂の風俗の動向」(笠井昌昭編『文化史学の挑戦』思文閣出版、平成一七年〔二〇〇五〕所収)
- (8) 「大阪名所絵巻物」のうち「新町九軒の夜桜」は、平成一二年度 大阪府立中之島図書館初夏の展示「松川半山展」(幕末明治初期の挿絵画家)で公開されており、同展観のパネルフレットに写真が掲載される。
- (9) 同論攷では、半山最初の挿絵として天保四年(一八三三)刊の大蔵永常『綿圃要務』とする。筆者は大阪府立中之島図書館蔵本を調査したが、前掲出註(7)の影山氏文献において指摘される通り、同書には半山の挿絵は確認できなかった。同書の挿絵に記名するのは暁鐘成と長谷川雪堤の二名。
- (10) 本書は都賀庭鐘『垣根草』の改題増補本。本稿筆者は大阪府立中之島図書館蔵本を参照した。

謝辞

本稿執筆にあたっては、肥田皓三先生(元関西大学教授)からのご教示によるところが大きかった。記して謝意を申し上げます。

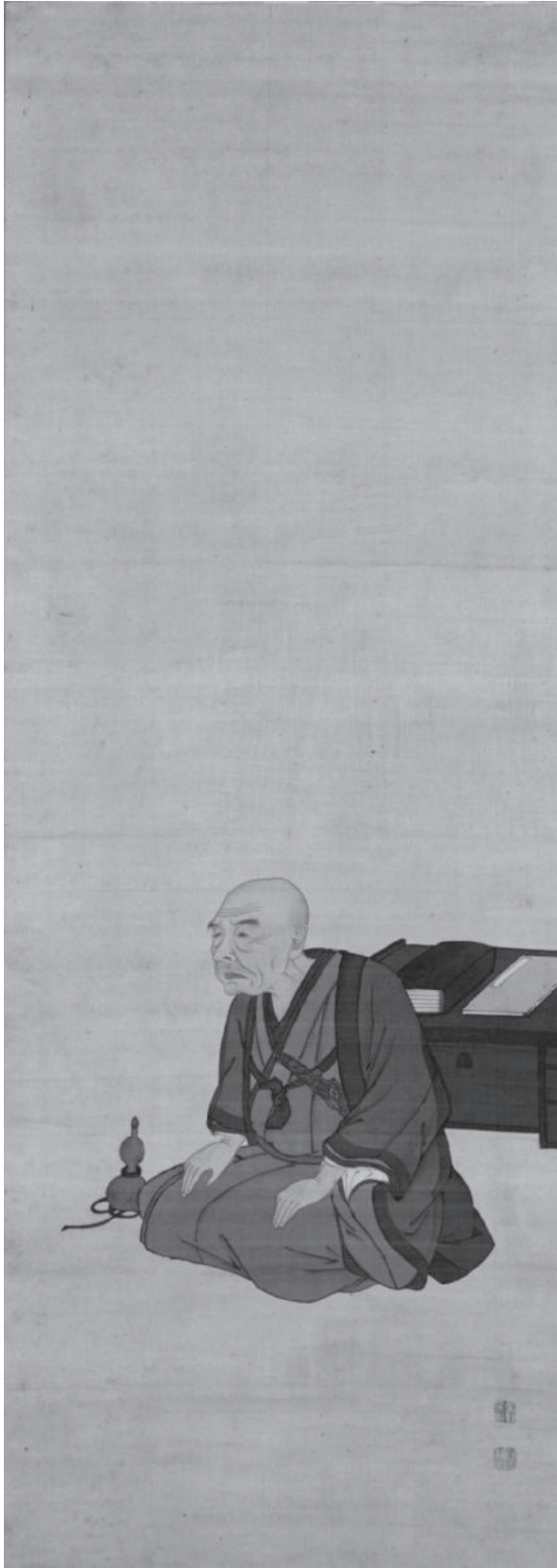




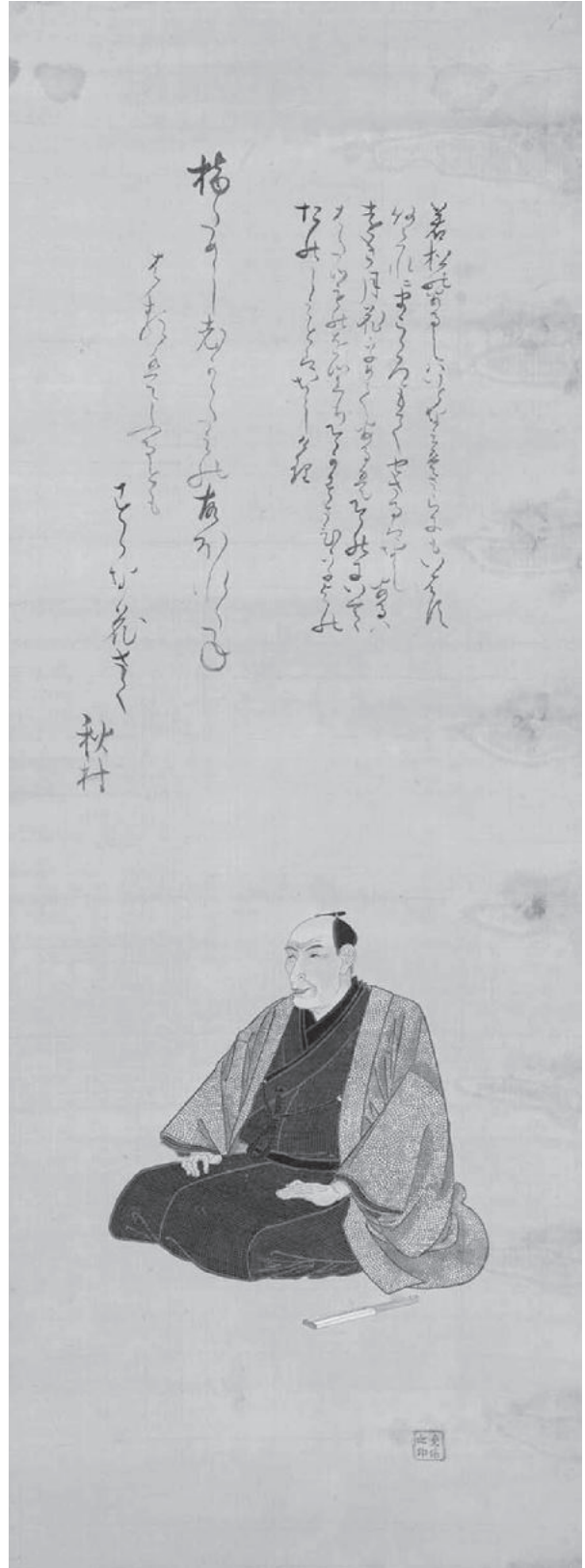
図版四  
木村明啓翁画像  
(曉鐘成像)  
半山落款部分



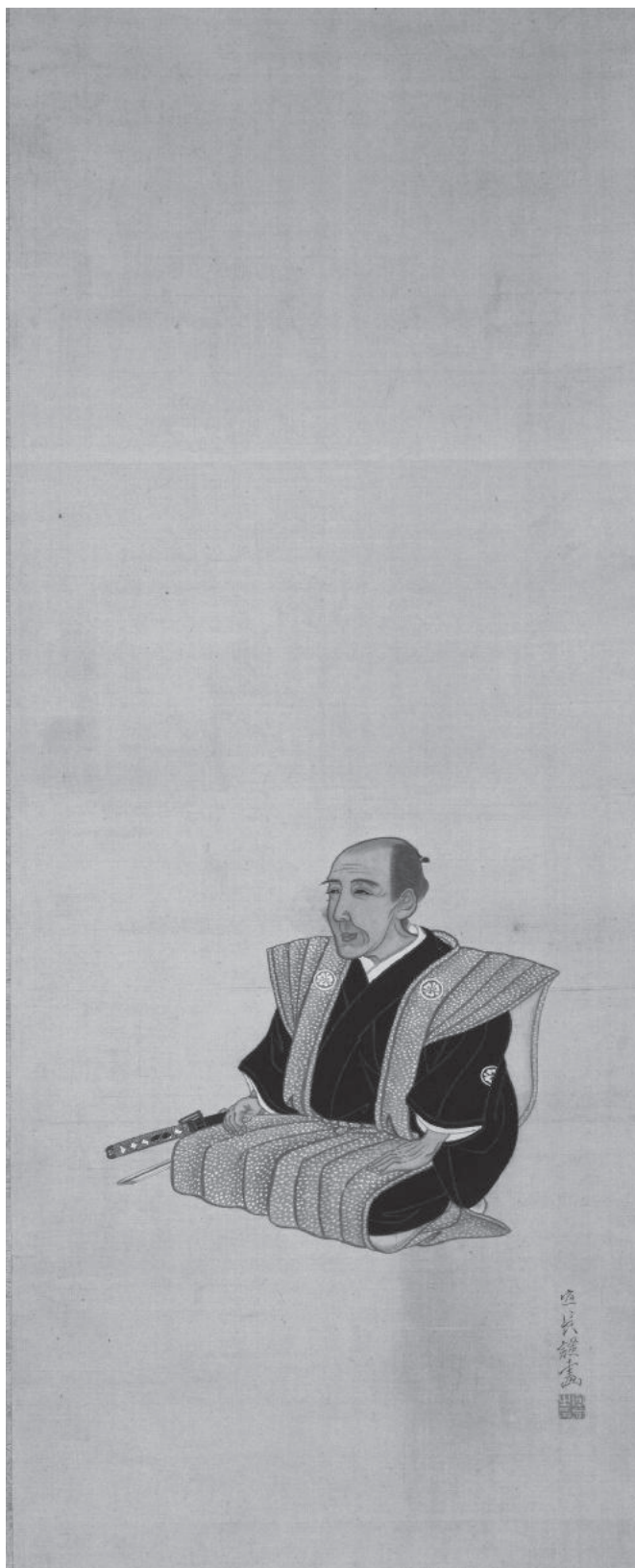
図版三  
木村明啓翁画像 (曉鐘成像) 肖像部分



図版六  
藪鶴堂像 藪長水筆（森田和子氏寄贈）



図版五  
若松主人像 長谷川貞信筆（伊勢谷慶子氏寄贈）



図版七  
米屋善七像 宣長筆（永井君子氏寄贈）

